

オスカー・ルイス著

「サンチェスの子供たち」

(柴田稔彦・行方昭夫訳、みすず書房、1969年503頁)

高山智博

本書は、メキシコ市に住む一貧困家族の実態を、ありのまま描き出した稀有の社会人類学的著作である。その特徴は、従来の紋切型のアンケートなどによる調査とは異なり、長期間にわたる家族の成員1人1人の調査、そして彼らの生活を自伝の方法でもって、組合せ、多面的な家族像を提示した点にある。

著者ルイスはこの本の目的を「急速に社会的・経済的な変化をとけているラテン・アメリカの大都市の中心部にある下層の共同住宅。その一間きりの家庭での生活、およびそこで成長することの意味を内側から見た姿を読者に提供することの意味を内側から見た姿を読者に提供することにある」と述べているが、まさに本書はラテン・アメリカの貧困を貧民の側から見た最初の、そして画期的な作品といえよう。

ルイスはその前著「貧困の文化 — 5つの家族」(新潮社)の中で、貧困の文化の概念をはじめて提起した。そしてこの本はその貧困の文化研究の一例である。

彼は現代世界の貧困とそれに付随する諸特徴を一つの文化、より正確に言えば、一つの  
サブカルチャー  
亜文化として理解し、それを貧困の文化と呼んだ。だが貧困であれば、どれも貧困の文化だというわけではなく、次のような社会的条件下における貧民の生活様式が、それに当たるといふ。(1)貨幣経済、賃金労働、功利主義的目的の生産、(2)未熟練工の慢性的な失業と仕事不足、(3)低賃金、(4)低額所得者に対する社会的・政治的、ないしは経済的機構の不備、(5)単系親族より双系親族の存在、(6)富や財産の蓄積、社会階層での昇進の可能性、そして貯蓄を強調し、経済的窮乏を個人の無能力、ないしは劣等性の結果だとする支配層の価値観の存在。このような条件にあてはまる人びとというのは、社会経済的格差の最下層にある人びと、もっとも貧しい労働者や農民、それに通常ルンペンプロレタリアートと呼ばれる大衆である。

つまり、貧困の文化とは、階級分化した資本主義社会における貧民の反応、ないしは適応である。事実、貧困の文化の特徴の多くは、既存の制度や機関において、人びとがそれを受

ける資格や金銭的な余裕がなかったり、あるいはそれに疑いを抱いているために、解決されない問題を局部的に解決しようとする試みだと考えることができる。たとえば、銀行から信用されないために、彼らは自分たちで、略式の信用貸借を組織せねばならないのである。だが、貧困の文化は、一般社会の客観的条件に対する適応だけではない。ひとたび成立すると、それは世代から世代へと伝わっていくのである。

これらの貧民の特徴の一つは、教育レベルが低いため、一般に労働組合にも、政治活動にも属さず、社会福祉にも浴していないこと。また銀行、病院、デパート、博物館なども利用してないこと。そして支配層の価値観や制度のあるものに対する批判的態度、警察への憎悪、政府や政治家に対する不信、さらに教会に対してすら冷笑的な態度をとることなどが挙げられる。メキシコの貧困家族でとくに目立つ点は、彼らの大半が正式の結婚によらず、同棲していることだろう。けれどもこの現象を不道德な事柄としてのみ判断するのは正しくない。その目暮しの男にとっては、正式の結婚や離婚が意味する支出や煩雑さよりも、野合や合意による結合の方が得策であり、女にとっても、一般に無責任と思っている男にしがみつ়くよりは、同棲の方を選ぶからである。そのうえ、女は自分の子供の父親に、夫としての法的身分を与えないので、男と別れる場合、子供に対し、さらに家屋やその他の財産に対して独占的な権利を有する。このように双方が同棲を望んでいる点が見られるのである。

近代国家における貧困とは、単に経済的窮乏の状態、秩序の混乱、あるいは何らかの欠如であるばかりでなく、それはまた一つの構造、一つの論理的機構である。そのうえ、この貧困の文化はメキシコばかりでなく、世界中の貧民にもなんらかの共通点が見られるという。しかしながら、貧困の文化の普遍性については批判がないわけではない。けれども本書に見られる貧民の特徴の多くは、ラテン・アメリカ共通のものということはできよう。

ルイスが「サンチェスの子供たち」の中で用いた方法を、著者自身「羅生門」式手法と呼んでいる。これは黒沢明監督の映画「羅生門」からヒントを得てつけた名称で、家族をその成員1人1人の目を通してとらえるアプローチの仕方である。このような方法で家族を形態や構造だけでなく、全体像として多面的に把握しようとしている。この点がユニークだといえよう。テープレコーダーや速記を駆使して集めた生のデータを、そのままの形で用いているため、小説以上の臨場感を与える。したがってそこに描き出された貧困家族の赤裸々な生活は、読者にとって大きなショックにちがいない。事実、本書はメキシコで非常な反響を

呼び、大論争を巻き起した。それは、一部の保守的な学者が、この作品を国辱的なものとして、裁判所に提訴したからである。これに対して、多数の知識人や学生がルイスを弁護する側に立ち、たとえメキシコの醜い面が描かれていても、それが真実ならば受け入れ、自国の現実を正しく認識すべきだと主張した。その結果、訴訟が却下されるという事件であった。しかしながら、メキシコでも当初、この本だけを読んだ人の多くは、どうしてこれが人類学的著作なのかと疑問に思ったという。だが、本書の前編ともいべき「貧困の文化 - 5つの家族」をあわせ読み、はじめてこの本が、故意に、メキシコの下層階級の自堕落な生活を暴露しただけの作品ではないということが理解されたのである。

我々はルイスの著作によってはじめて、メキシコの貧民がいかにかに生き、何を考え、そしてどんな欲望をいだいているかを正確に知らされた。彼の一連の貧困研究の価値は、実在する家族と彼らの住む社会の忠実な記録という点にあり、これはルイス自身がいう通り、現在と将来における文化の比較に役立つ史料として貴重な文献となろう。

一般にラテン・アメリカというと、経済ないしは南北問題という観点から取扱われ、その文化や住民の心理などは、ほとんど無視されている。だが、このようなことでラテン・アメリカを正しく理解できようか。またこれらの諸国の抱える問題の解決に貢献できるだろうか。われわれはともするとラテン・アメリカ諸国を低開発国として、下に見るきらいがあるが、本書に出てくるメキシコの貧民の生活ぶりは、疎外や公害に悩むわれわれより、むしろ人間らしさに満ち満ちているとはいえないだろうか。

本書をラテン・アメリカの大衆自身の証言として、全てのラテン・アメリカ研究者に一読をおすすめしたい。